韓国国立中央図書館主催 海外韓国学司書ワークショップの紹介

河村　真澄（関西館アジア情報課）

はじめに

筆者は、2023年10月23日から10月27日にかけて、韓国国立中央図書館（以下「NLK」という。）が主催する「2023年海外韓国学司書ワークショップ」に参加した。このワークショップは、韓国国外の図書館で働く韓国学分野の司書、職員を対象としたもので、2005年から始まり、2023年で16回目の開催となる。本稿では、韓国学分野の図書館サービスに関心のある方に向けて、このワークショップの概要を紹介する[1]。

1　開催目的

ワークショップの開催目的として、以下の3点を挙げている。

・海外の韓国学図書館の司書の韓国文化に対する理解増進を通して、今後の韓国学の発展に対する関心と基盤（財政・人的資源・蔵書数）を拡大し、韓国文化の拡散に寄与すること。
・韓国学・図書館情報学関係の専門家の講義、参加者によるテーマ発表及び討論を通して、韓国学図書館の運営に有用な専門知識を養い、各国の韓国学図書館の動向を共有することにより、相互の知識情報の連携を強化すること。
・緊密な人的ネットワークの構築を通して、今後のNLKとの相互交流・協力のための土台を築き、参加機関間の情報交換や協力プロジェクト提案の機会を提供すること。

すなわち、図書館業務に資する知識や他機関との情報共有の場を提供することはもちろんのことながら、海外の図書館における韓国学研究の基盤強化への賛同者を現地に得るとともに、参加者・機関間のコラボレーションを通じた新たな事業の創出を促そうというものである。

2　応募資格・参加者

募集定員は毎年20名程度で、韓国国外で韓国関連資料や情報に関する業務経験（収集・整理・サービス等）がある司書等が対象である。図書館に限らず、研究所やアーカイブズからの参加も認めている。

今回参加したワークショップでは、全19名の参加があり、うち15名は大学図書館、残る4名は国立・公立図書館の所属である。

勤務先の図書館の所在地は、米国(10)、カナダ(2)、オーストラリア(1)、フランス(1)、日本(1)、シンガポール(1)、フィリピン(1)、バングラデシュ(1)、ルーマニア(1)で、英語圏が最も多かった（括弧内の数字は人数）。

3　ワークショップの構成

ワークショップは主に、①NLK見学、②参加者によるテーマ発表、③レクチャー、

表 ワークショップ日程

10月23日（月）
- 入国、ホテルチェックイン
10月24日（火）
- NLK見学 - オリエンテーション、参加者自己紹介 - NLK報告 “The National Library of Korea in 2023: Issues and challenges” - 参加者によるテーマ発表
10月25日（水）
- レクチャー “Types and characteristics of Korean old books” “Digital Korean studies: New tasks of digital scholarship” “The era of movable type: Old books of Korea” “Treasures of the National Library of Korea: Old documents and books”
10月26日（木）
- 類縁機関見学 大統領記録館 国立世宗図書館 清州古印刷博物館
10月27日（金）
- 類縁機関見学 国立中央博物館（希望者のみ） - ホテルチェックアウト、出国

URLの最終アクセス日は2024年5月2日である。

[1] 年度によって募集条件が異なる。最新情報はNLKウェブサイト “International Network for Korean Studies Librarians” を参照されたい。
<https://inkslib.nl.go.kr/>

④類縁機関見学からなる。基本的なスケジュールは表のとおりである。このほか、昼食会、送別会等が期間中に計5回ほど開かれ、参加者とNLK担当者が交流する機会が用意された。

なお、これらのプログラムは英語（一部は韓国語からの逐語訳）で提供された。

4　費用負担

宿泊費、プログラムにかかる交通費、食費はNLKの負担で、往復航空券代、旅行保険料は参加者の負担である。滞在中はNLKが用意したホテルに宿泊する。

5　各プログラムの紹介

ワークショップ期間中は連日プログラムが盛りだくさんであった。紙幅の都合もあり、一部を紹介する。

(1) NLK見学

NLK職員の案内のもと、他の参加者とともにNLKの館内見学を行った。参加者の関心を最も集めていたのはNLKの実験的なデジタルコンテンツである。

NLKは「実感の湧くコンテンツ・体験する図書館」をキャッチフレーズに、多様なデジタルコンテンツに触れることができる実感体験館という展示スペースを設けており、この実感体験館は3つの空間「開かれた広場」「知識の道」「実感書斎」で構成される[2]。

「開かれた広場」はNLKのゲートを入って真正面にあるホールで、韓国古典文学の世界をデジタル技術と現代的な感覚によって表現したメディアアート作品「K-文学の再発見」と、近代文学の作家が映像のなかから観覧客に語りかけてくる「作家との出会い」の2つのコンテンツを提供している。

右の写真1は「K-文学の再発見」の様子で、写真ではわからないが、音楽とともにプロジェクションマッピングによる映像がダイナミックに移り変わっていく。『関東別曲』という16世紀の詩歌を表現したものである。

写真2は「知識の道」で流されている映像コンテンツ「作家のノート」である。「知識の道」は、NLK本館と本館に隣接するデジタル図書館[3]の連絡通路に置かれている。これはインタラクティブな映像コンテンツで、映像の映る壁や床を触れたり踏んだりすると、映像が反応して変化を見せる。写真2の映像は黄順元（1915－2000）の短編小説『にわか雨（소나기）』を映像化したもので、このほか計4種の近現代文学の世界を映像で表現している。

写真3の「スマートラウンジ」も、同じ「知識の道」で提供されている。これは、利用者の嗜好や関心事に関する質問に二択で回答していくと、その人に向いた本を推薦してくれるというサービスである。訪問した際は、推薦された図書を手に取って読めるよう、ディスプレイのすぐ隣に図書の実物が置かれていた。

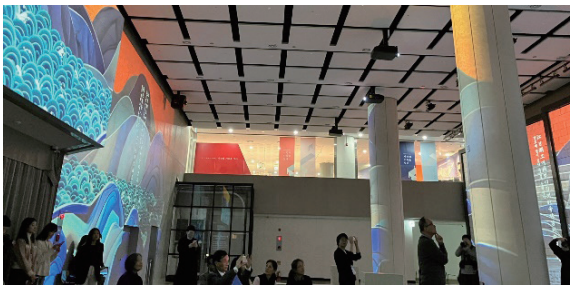

写真1　K-文学の再発見（開かれた広場）

写真2　作家のノート（知識の道）

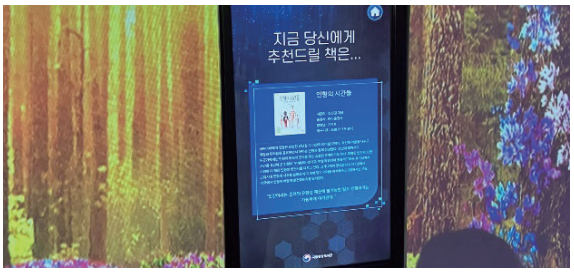

写真3　スマートラウンジ（知識の道）

[2] 以下の記事でも紹介されている。
「韓国国立中央図書館（NLK）、新技術融合コンテンツ事業についての報告書を公表」Current Awareness Portal. 国立国会図書館. 2023.12.13.
<https://current.ndl.go.jp/car/202065>

[3] デジタル図書館は、主にデータベース等のデジタル資料を利用するための建物である。

3つ目の展示スペース「実感書斎」はデジタル図書館内にあり、「収蔵庫映像」「検索の未来」「デジタルブック」「インタラクティブ地図」「XR 美術館[4]」の 5 種類の実験的なコンテンツが体験できる。

写真 4 は、全自動のロボットが本を出納する未来の書庫をイメージした映像である。

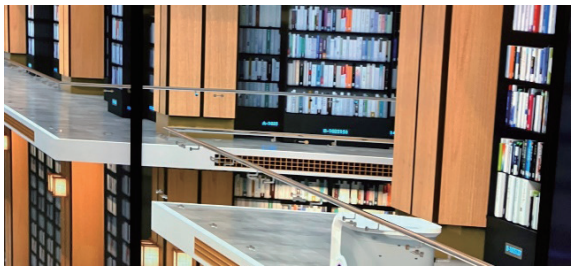

写真 4　収蔵庫映像（実感書斎）

写真 5 の「デジタルブック」は、19 世紀の魚類事典『玆山魚譜』をもとにしたコンテンツで、本の形をしたスクリーンに、プロジェクションマッピングで画像が投影されている。スクリーンをタッチすると、ページをめくったり、現代語訳を表示させたりできる。

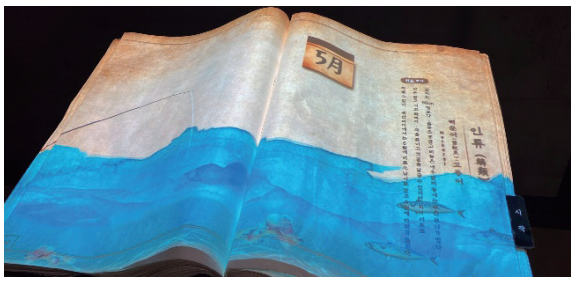

写真 5　デジタルブック（実感書斎）

写真 6　XR美術館（実感書斎）

写真 6 は「XR 美術館」で、ゲーム機のコントローラーのような機器で操作し、画面内の建物に入っていくと、19 世紀製作の屏風画『大院君雲蘭』等を高解像度の画像で鑑賞できる。

これらのコンテンツはまだ実験的な段階に止まるものも多いが、変化していく社会に対して図書館がどのようにアプローチすべきかを考えさせられる、刺激に満ちたコンテンツであった。

(2) 参加者によるテーマ発表

① Nah, EunHee（ハーバード大学）
“Korean posters workflow”

ハーバード大学イェンチン図書館で進めている北朝鮮プロパガンダポスターと韓国映画ポスターの収集プロジェクトについて紹介があった。イェンチン図書館では、1990 年代以降に手書きで作成された北朝鮮のプロパガンダポスター（約500 点）と 1950 年代以降の韓国の映画ポスター（約 3 千点）を収集している[5]。それぞれ、北朝鮮のポスターは中国北東部のベンダーから、韓国のポスターは韓国国内のベンダーから入手しており、前者についてはデジタル化して公開する作業を進めているという。

学術研究の対象となる資料が文字資料からビジュアル資料に拡大しており、ポスター等を収集する意義が高まっているとのことである。

② Shin, HeeSook（コロンビア大学）
“A unique Korean archive: Theodore Richards Conant Collection at Columbia University Libraries and collaboration on digital archival projects”

コロンビア大学図書館で所蔵する映写技師コナントのコレクション[6]について、入手経緯、主要資料の形態（映画フィルム、音楽テープ、写真、ラジオ原稿等）ごとの概要が紹介

[4] XR は現実世界と仮想空間を融合する技術の総称で、VR（仮想現実）・AR（拡張現実）等が含まれる。

[5] 所蔵資料はハーバード大学図書館の蔵書検索システムで確認でき、一部は画像も閲覧できる。
Research Guide for Korean Studies > Audio / Visual
- North Korean Propaganda Poster Collection images
- South Korean movie poster collection at the Harvard-Yenching Library
<https://guides.library.harvard.edu/c.php?g=310159&p=2077426>

[6] Theodore Richards Conant Collection, 1949-2010, bulk 1953-2000
<https://findingaids.library.columbia.edu/ead/nnc-ea/ldpd_8328755>

された。その後、韓国にある韓国映像資料院とのコラボレーションによるデジタル化プロジェクトの現状について説明がなされた。

(3) レクチャー

① Ok, YoungJung（韓国学中央研究院）
“Types and characteristics of Korean old books”

朝鮮古典籍の分類、木版・木活字・金属活字による代表的な古典籍の紹介、木活字・金属活字印刷の作業工程、印刷文化をめぐる社会的背景について解説がなされた。

例えば、ある印刷物に現れる活字の均一性が金属活字使用の判断の根拠になること、現存する古典籍には金属活字と木活字を混用する事例もあること、大量生産の場合にはより廉価に印刷できる木版が使用されたこと等の説明があった。

写真7　レクチャーの様子

② Kim, Hyeon（韓国学中央研究院）
“Digital Korean studies: New tasks of digital scholarship”

デジタル・ヒューマニティーズの試みとして、「漢陽都城タイムマシン」プロジェクトについて紹介がなされた[7]。このプロジェクトは韓国文化財庁（現・国家遺産庁）が推進した事業で、歴史的建造物や遺物等の文化財を3D化してウェブ上のプラットフォームに再現することを目指すものである。また、単に歴史的景観を再現するのではなく、セマンティック・データ・アーカイブを同時に構築することで、歴史上の事件等とデジタル化した事物を関連づける作業も行っている。

オントロジーには、EKC2022（Encyclopedic Archives of Korean Culture）データモデルが用いられる。漢陽都城タイムマシンのデータ公開のデモサイトを見ながら、朝鮮時代の王宮での宴で使用された服装や食べ物に関するデータが、どのように構造化されているのかについて説明が行われた[8]。

③ Lee, JungHyo（NLK古文献課）
“The era of movable type: Old books of Korea”

古典籍の製作技術的な面に関して、時代的な変化や中国・日本との差異について説明がなされた。例えば、朝鮮王朝時代の鋳字としては1403年の癸未（きび）字が最古とされるが、その2代後に当たる甲寅（こういん）字（1434年鋳字）の書体の活字は、その後18世紀まで繰り返し鋳造されたとし、各年代の字体を並べて紹介がなされた。

また、朝鮮本は中国・日本の古典籍と比較して紙のサイズが一回り大きく、綴じ穴が5つ（中国・日本は四つ目綴じ）であることが紹介された。また、講義後に版木や古典籍の実物紹介もあった。

写真8　版木の実物

④ Kim, HyoKyung（NLK古文献課）
“Treasures of the National Library of Korea: Old documents and books”

古典籍の形態、料紙、書体等を概観した後、朝鮮国王発給文書等についての古文書学的解説が行われた。朝鮮国王発給文書の様式は細かく分類すると約30種類あり、そのうち教書、勅語、王旨等の代表的な10種類について、文書上の特徴や使用される状況の説明がなされた。講義後に実物の紹介があり、科挙に合格した者へ乾隆21（1756）年に王が出した

[7] 漢陽は朝鮮王朝の首都で現在のソウルを指す。
[8] 詳細は以下のウェブサイトを参照されたい。
<http://dh.aks.ac.kr/hanyang2/wiki>

教旨（赤色に染められ紅牌と呼ぶ）等が紹介された。

(4) 類縁機関見学

世宗特別自治市の大統領記録館と国立世宗図書館、清州市の清州古印刷博物館、ソウルの国立中央博物館を訪問し、各機関職員の案内のもとで見学を行った。

写真 9　大統領記録館の見学風景

おわりに

ワークショップ期間中は、文字通り朝から晩までスケジュールがぎっしりと詰まっており、非常に密度の高い 1 週間であった。

各プログラムの内容もさることながら、開催目的の項でも触れたとおり、参加者間の交流を狙いの一つとしており、実際に参加者間で意見交換する時間も多く設けられ、海外の図書館で韓国関係の司書として働く方々のお話を伺う貴重な機会にもなった。

韓国関係の図書館や研究所で司書・職員として働く方で、他の図書館での業務の様子や外部との連携協力に関心のある方には、非常に有意義な機会となるはずである。

（かわむら　ますみ）